



## 浜松 楽器博物館

現代中国学部 三好 章

浜松は、楽器の生産地として世界的に知られている。とりわけ、YAMAHA、KAWAIという世界的なピアノ量産メーカーの所在地であり、その源流は江戸時代以来の木工家具の産地であったこと、その職人たちが新しい時代に適応しようとしたことなどに求められる。また、それゆえというべきか、この地は音楽の盛んな地である。一例を挙げれば、若手の登竜門とも言うべき世界的な「浜松国際ピアノコンクール」が毎年開催されている。その水準は、2000年第2位の上原彩子は2002年チャイコフスキー国際コンクール優勝、最近では2018年2位の牛田智大が昨年のショパンコンクールでは2次予選まで行くなど、めざましいものがある。



そうした浜松に「楽器博物館」がある。駅ピアノのある浜松駅北口を出て、右に折れて3分ほど歩くだけという、極めて便のよい立地である。途中、コンクールの会場ともなるホールを持つアクトシティがある。道々、音楽関係のモニュメントや演奏会のポスターもあり、楽しい気分になってくる。博物館は1995年4月に設立

されたもので、国内唯一の公立楽器博物館であり、クラシック音楽に関係するヨーロッパに由来する各種の楽器はもとより、世界各地の民族楽器が、触れて演奏できるようになっているものも含め3300点（博物館HPより）以上展示されている。要するに、音が出るものは楽器、という単純明快なコンセプトが根柢にあるように感じられる。当然の事ながら、平均律を中核にする西洋古典音楽の背後にある幅広い世界が展示され、体験できるのである。



特に興味深いのは、浜松という土地柄からか、ピアノかもしれない。ここでピアノ展示は、チェンバロが決してピアノに至る途中経過の、発展途上の楽器ではなく、工芸品としても調度品としても完成度が高いものであることを示している。由来を一にする同根の楽器であるハープも、中央アジアの各種楽器と共に展示がある。

さて、表現者が作曲も演奏も共に行っていた時代、次第に多くの聴衆を前にするようになると、必然的に演奏会場も規模が大きくなり、演奏効果の拡大が求められる。それに伴う鍵盤数の増大がやがて現在の88鍵となる。博物館の展示ピアノからは、19世紀ヨーロッパにおけるピアノの音が、現在の演奏音からほど遠かったことがわかる。例えば、現在では多くのピアニストが愛用するスタインウェイ。これほど工業製品としてのピアノの性格をよく示すものはな

いであろう。特に高音部の突き抜けるような音は、伸びのある中低音部と共にこのメーカーの特徴と言ってよいであろう。しかし、ショパンのころスタインウェイは生まれたばかりであった。博物館には、彼が愛用したプレイエルが展示されている。スタインウェイと異なりややくぐもった丸い音だが、粒はそろっている。ノクターンなどは夕霞を表現できるプレイエルに軍配が上がるのかもしれない。

スタインウェイはもともとアメリカという新興工業国で産声を上げ、後にドイツにも進出した。この間、音楽の大衆化という時代に直面し、自動演奏装置を組み込むことによって自宅での名人芸の再現を可能とした。再現芸術ということになるとベンヤミンの論考が想起されるが、それ以前のことである。ここに展示されているスタインウェイの自動演奏ピアノは、まず演奏家が音を出す時のピアノのアクションの動きを利用して、紙シートに穴を空け、それをロールにして記録する。再演するときはそのロールを動かして穴に空気を送ってハンマーを動かす、というのが基本的な仕組みである。まさしくアナログであるが、それがフルにピアノが弾けない一般の愛好家の望みだった。いつの時代でも、目の前で本物（にできるだけ近い）演奏を聴きたいという思いに、違いはない。

博物館のもう一つの特徴は、「民族楽器」の展示であろう。とりわけバリのガムランに関するものが充実している。もちろん、オランダによる植民地時代に手を加えられたものであり、元の姿からはほど遠いのであろうが、楽器の美々しさ、洗練された様態には、観光化されたものであっても、「西洋音楽」とは異なったりズムや音階、和声を持つ音楽の独自性を見ることができ。打楽器類の豊富さには、眼を見張るものがある。人間が初めて音楽を意識した時、音が出るもの、つまり楽器として自分の身体、近くの石や棒きれ、動物の骨などがあつたはずである。工業化以前の社会では、そうした身体楽器、

自然打楽器が豊富にあつた。旋律楽器もそうである。打楽器を組み合わせるとして旋律を奏で、1本の弦で音程を作る。形態は様々でありながら、よく見ると同じ構造のものにしばしば出くわすのも、この博物館のおもしろさであろう。



音楽は自分の趣味であり、また生き甲斐にもなっている。とりわけ、チェロは中学校の音楽準備室に布ケースに入って転がっていたこともあり、それ以来の友である。高校3年の時、「第9」をやったことが決定打となった。たいしてうまく弾けるわけではないし、学生の頃も真面目にレッスンに通った、というわけではない。それでも、名古屋に来て暫くして地元のアマオケに参加し、最近までずっと隅っこで演奏してきた。単純に、楽しかった。共通科目で「音楽と人間」なる科目を担当し、主にクラシック音楽の歴史を西洋近世・近代史のなかで論じて来た。その中で、音楽とそれが存在する社会は深く関わり合っていること、ジャンルが違っても音楽は音楽であることなど、あまりアカデミックではないことも話してきた。少しでも音楽に興味を持ってもらえれば、と思ったからである。以前から興味があつたこともあり、この文章を書くことを引き受けたが、特集の趣旨からはほど遠いものになっているのかもしれない。しかしながら、どこかひとところからでも関心が生まれれば良いのではないかと念じて短文を終わりにしたい。